

しまったことは残念であるが、滞在中に得られた知見や人的ネットワークを当研究所での今後の研究活動に生かしていきたい。(余田翔平 記)

国連アジア太平洋統計研究所 (SIAP) ウェビナー

2020年8月20日(木)に、国連アジア太平洋統計研究所(SIAP、千葉県千葉市)が「新型コロナウイルス感染症死亡率測定に関する挑戦 Challenges of measuring the mortality of COVID-19 Pandemic」と題するウェビナーを開催し、米国ランド研究所のラファエル・ヴァルダバス(Rafael VARDAVAS)教授、バーモント大学サラ・ノワク(Sarah NOWAK)准教授、SIAP李銀求(LEE Eunkoo)氏と筆者が、米国、韓国、日本における新型コロナウイルス感染症の死亡統計に関して報告を行った。

進行中の感染症の致死率や死亡率は様々な要因により影響を受け、その把握が難しいが、韓国ではこのウェビナー直前に、週別の死亡数が公表されるようになり、それをういた地域別や年齢別の超過死亡についての解説があった。新型コロナウイルス感染症も当初の想定に反して長期化しており、各国のデータに対する取り組みも変化してきているようである。(林 玲子 記)

日本行動計量学会第48回大会

2020年9月1日(火)～9月4日(金)に早稲田大学戸山キャンパスで開催予定であった日本行動計量学会の大会は、対面開催が中止となり、チュートリアルセミナー、シンポジウム、基調講演のみがPDF資料の配信やウェビナーで行われ、口頭発表、ポスターセッション、ラウンドテーブルについては、登壇予定者が参加費を支払い、抄録を提出した場合には、抄録集に掲載した内容を大会にて「発表したもの」とみなされることになった。筆者は、岩本健良(金沢大学・人文学類)と平森大規(ワシントン大学大学院・社会学研究科)と共同で、「調査票調査で性的指向・性自認を捉える—SOGI 設問の試験的調査に基づく考察」を発表した。本発表は「社会」という部会に入っていた。その他には、教育、数学・統計、政治・経済、心理・認知・情報、言語・文化、マーケティング、マーケティング・経営、教育・数学・統計、教育・医療といった部会が設けられていた。人間の行動に関して計量的アプローチの研究を行う、計量的方法の開発等に関心を持っているという共通点がある以外、専門も関心もさまざまである学会員の方々からの、自分たちの発表に対する反応やコメントを楽しみにしていたので、対面でなくてもオンライン報告ができなかったのは残念であった。

(釜野さおり 記)

第30回日本家族社会学会大会参加報告

今年でちょうど30回目を迎えた日本家族社会学会大会が、2020年9月12日(土)、13日(日)の2日間にかけて開催された。本大会は東北大学川内南キャンパスにて(仙台市)開催予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、オンラインによる大会運営となった。

自由口頭報告は33件と前回大会と比べて少なかったものの、結婚・出生・子育て・高齢期など人口問題に関わる部会が多く編成され、例年通り活発な議論がなされた。テーマセッションは、家族の多

層性・多様性を地域性・産業構造との連関から探るライフコース研究，調査対象及びそれと家族関係を持つ者（配偶者・子どもなど）双方から回答情報を収集したダイアド・データに関する二部会から成り，いずれも新たな調査手法を取り入れた家族研究の発展可能性を提示していた。

シンポジウムは、「＜家族の多様化＞と＜子どもの福祉＞は両立するか」と題して，子どもに関する諸現象，生殖技術としての代理出産，ステップファミリー・里親養育などの「中途養育」について，それぞれ子ども社会学，生命倫理学・ジェンダー論，当事者の立場から報告がなされた。

研究所からは，余田翔平（人口動向研究部室長）が部会司会を務め，守泉理恵（同）が「出生数1人の女性の分析：日本における動向とその特徴」，斉藤知洋（社会保障基礎理論研究部研究員）が「家族研究におけるダイアド・データの収集と課題」について報告を行った。（斉藤知洋 記）

人口高齢化と AMR（薬剤耐性）に関するグローバル専門家会合

日本医療政策機構（HGPI）と米国を拠点とする高齢化グローバル連盟（Global Coalition on Ageing）の主催により，2020年10月7日（水）8:00～9:30に『日本の超高齢化社会における薬剤耐性（Antimicrobial Resistance: AMR）の脅威：ヘルスケア，公共政策，および経済的な健全性への影響』と題するグローバル専門家会合が開催され，筆者も参加した。

AMRは2015年のG7エルマウ・サミットでグローバルヘルスの重要事項とされ，日本においても「薬剤耐性（AMR）対策アクションプラン」が2016年に策定されている。抗生物質（抗菌薬）の使い過ぎにより，薬剤耐性を持つ新たな微生物が蔓延すれば大きな脅威となるが，特に近年の世界的な高齢化によりその脅威が増している，というのが本会合開催の契機であるようだ。

昨年の国立国際医療センターによる推計によれば，日本では年間8,000人が薬剤耐性菌による院内感染で亡くなっているとされている。また，家畜飼育で抗菌剤が用いられ，それが薬剤耐性菌の蔓延につながることも危惧されており，「ワンヘルス」つまり動物と人間の健康を一つ（ワン）にとらえるというアプローチも取られている。世界で実際にどの程度薬剤耐性菌が影響を及ぼしているのか，具体的な数値を出していきながら対策を練ることが求められよう。（林 玲子 記）

高齢者の福祉に関するインドネシア 国家開発計画省（BAPPENAS）ウェビナー

高齢化が進行しているインドネシアでは，国家開発計画省（BAPPENAS）が「高齢者情報システム（SILANI）」を構築し，ジャカルタ，ジョグジャカルタ，バリの高齢者を対象に標本調査を実施している。そのSILANIを用いて，2020年7月に，新型コロナ感染症の影響に関する高齢者調査が行われた。国際高齢者の日（10月1日）にちなみ，調査結果報告会第一弾となるウェビナーが2020年10月7日（水）にオンライン開催された。BAPPENAS 貧困削減及び地域エンパワメント部長マリキ氏が，調査結果のうち，高齢者のメンタルヘルスに関わる部分を報告し，インドネシア衛生省，インドネシア大学，オーストラリア国立大学，インドネシアNPOなどから追加報告，コメントが述べられた。また国際比較の視点として，ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスのアデリーナ・コマス＝ヘラーラ氏が国際的な状況について，筆者が日本の状況について報告した。

インドネシアでは，孫と暮らす高齢者のうつが一番多く，感染拡大によるロックダウンなどにより，特に男性高齢者の不満が高まった。しかしながら，高齢者のメンタルヘルスに与える影響は，若者に